

五才児、一日の流れ



堀合 文子

幼児の生活は、その園へ入園したその日から流れ始める。その流れは、初めは細いせせらぎにも似るものだが、幼稚園生活が活発になるにしたがつてその流れは、ドードーと音を立てて流れる。その流れは一日流れてまた次の日へ、また次の日へと流れていく。年齢によってその内容は異なれども、その流れはほとんど変らない。三才、四才、と教師中心の生活をしてきて、五才児になると、幼児の社会生活が盛になると共に幼児中心へと移行していく。

○日常の流れ

- ・朝、登園してくると靴を取り替え、コート、帽子をかけて自分の部屋へくる。
- ・挨拶をして手洗い、うがいをする。

- ・自分の好む遊びをはじめる。
- ・友だちも登園してくるので大いに生活（遊び）が展開される。
- ・教師のその日の計画がある時は、その幼児の生活の中に入れていく。幼児の生活は終始続けられているのであるから、教師は機会をみつけてグループで指導したり、個人に指導したりする。
- ・幼児は交代して計画に参加する。その日の中に参加できない場合は次の日に参加する。
- ・教師は、その計画の指導のみでなくもちろん幼児の自由なあそびの指導もそれぞれの場においてする。
- ・いろいろな経験習慣を機会をとらえて、その場その場で指導する。
- ・かたづけをする。
- ・おべんとうをたべる。（大体午前十一時半頃より支度して、はじめめる）
- ・済んだ人からあそぶ。
- ・レコードの合図で集り体操をする。（午後一時）
- ・部屋、自分たちの園での分担の場所のかたづけをする。
- ・帰る支度をして帰園する。

一日の主な流れは以上のように、前述したようにこの流れが入園当初より流れはじめ、五才児になったので特殊なことのない限り、この流れは一日一日流れ、くり返えされて次第にその流れは内容も

豊富になれば活動も活発になってくる。幼児の活動をうながす合図があるわけでもなく、おべんとうの時または用事のある時は、友だち同志、またはその日の当番が呼びあつて生活は流れていく。

幼児の生活は五才児になれば特に教師が指示をしなくともスムーズに流れていくが、やはりスムーズに流れるには三才なり、四才での間の教師の働きかけや、あそびの指導というものが大きな影響を示してくる。

日常の習慣となつてしまうことはもちろんだが、五才児以前の教師の幼児への働きかけや、あそびの中の指導、あそびの指導ということが大きく反映してきて、幼児自身の内容にも及ぼしてくる。

五才児になつて一日の流れもスムーズにいくから、教師の計画のみ遂行すればよいと思うが、また五才児は五才児なりにまた一歩前進しなければならぬので、計画の指導と共に、あそびの指導も常におこたつてはならない。

○ある一日（四月）

午前八時三〇分、幼稚園について部屋をのぞくともうT君と、Yさんお部屋で絵をかいていた。お姉さんと一しよにきたらしい。早速、窓をあけたり、靴箱をだしたり、机をふいたり、朝の準備をしていると、ぞくぞくと「おはようございます」と元気よく入ってくる。お天気がよいせい叫声もはずむ。みんな庭へ吸い

こまれるようにとんでいく。絵をかいていたT君、Yさんもかたづけて後をおいかけた。朝の準備もできたので私も外へでると、もう腕まくりして砂場はダム作り、夢中になってやっている。女の子の一部の人はすべり台のところへごきごきして何やらまごごらしい。

もう私が部屋でごしゃごしゃしている間に外では一日の生活がはじまり、はじまり――

「すてきなダムね」「うんこれ、ここからこうすると水がでるのだよ」「先生、みて、ここ、こんな深いよ」「先生、腕まくって、この水おもしろいよ。ここ、こうするとしゅーっとなくなるのだよ」「先生、ちょっときて」「先生、たべにきて」「あら、おいしいこと」「はいどうぞ」「私のもどうぞ」「先生、私の家へあそびにきて」「何と忙しいこと。あの人にも、この人にも満足させてあげたい。たとえちょっとでも――」

「先生、箱ない」「どんな箱」「どんなでもいいの小さくても」「部屋に入つて一しよにさがす」「ああ、これでいい」「何ができるのかしら」「ぼく飛行機作るんだ」「すてきなのを作つて下さい」「僕にも箱」「これどうかしら」「うんいいよ」「部屋の中は絵をかいている女のひとその空箱でつくる人と。さっきの砂場はどうなったかしら」のぞくと、またまた、拡大して砂場一ぱいすばらしい工事。みんな夢中だ。「先生、お山にこんなのがあつ

たの” “まあきれいな先生、腕輪つくって” “つくりはじめる。
”もうみんなも作ってみてごらんなきい。いいのできるわよ”
”先生できたよ” “先生ゴムない” “あら、いい飛行機ね。よく
考えたのね。その尾翼のところをもう少ししていねいにすると、も
っとすてきね” “こんなものも何かにつかってみたらどうでしょ
う” (中略)

——みんなそれぞれよくあそんでいる。夢中で生活している。
Kさんも五才児になったら急にお友だちともよくあそんでいるし
何だか私もうれしい。今日はお話をきかせてあげようと計画して
あったのだが、それから歌を新しく教えようと。だけどこんなよい
お天気にとでもよくあそんでいるまたすばらしいものを、それぞ
れ作ったりやったりして——みんなのようすをみてこんなこと
を考えていて、ふと時計をみたらもう十一時すぎ。おべんとうに
しなければ……。お当番の人にたのんでみんなに”おべんとうだ
からかたづけましょう”と伝える。——自分の今日の計画はでき
なかつたが、これでよいのだ。それぞれみんな自分の生活、あそび
を十二分に生活していた。うたをうたうために、話すためにその
生活をちゃん切つて集めないことがどんなにみんなにプラスにな
ったことか。私は、うたったり、話したりしたことで大いに指導
したと私の満足感はあるが、幼児の生活の流れをちゃん切つて幼
児の収穫というものがはたしてどちらが有効か。彼らは彼らのあ

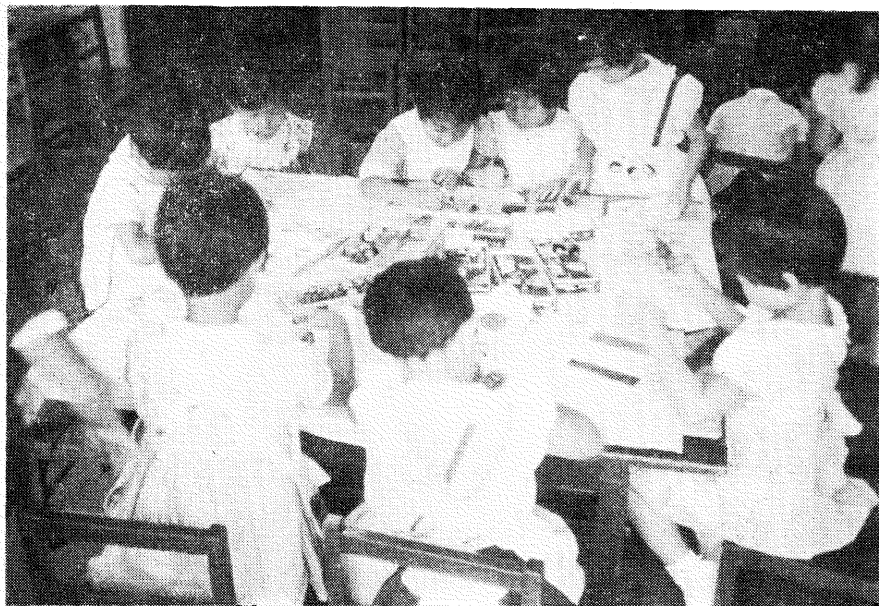
そびの中でおとなの指導よりはるかに大きな収穫を得ているの
だ——こんなことを考えながら私もおべんとうの支度をはじめ
た。(後略)

○一日の流れは次の日へと流れる

(六月のある日)

昨日から話合つて時計を作りはじめている。今日も、計画は時
計づくりだと考えて朝部屋をのぞくと、何とも私より先に時計
づくりが始まっている。”おはようございます” “早いね。も
う時計やさん” “うん、昨日のつづき”





「僕ね、今日箱もってきたの」

計画のルートにのせたのは私だが、昨日はじまった時計づくりも今日はもう自分たちから始められた。

その中登園してきたお友だちも時計をやりだす人、又横目でみながら外の砂場へ、ままごとへ、山へとあそびに行く人もいる。

時計づくりの人の指導、砂場での指導、ままごとへのお客さま。お山の草つみ、とまた忙しい一日が始まる。

その中時計もできた人は腕まくりしながら砂場へ、ごさを持つてままごとの仲間へ、砂場の人が手をふきふき、「僕もやる」「僕昨日のつづき」「私もやる」と選手交代である。

「何でつくりましょう」「私はこれ」「僕は考えたんだ。カレンダー時計」「こんなもの使ったら」「○○さんのはきれいな時計ね。花時計かしら」「先生、たべにきて」「はいちょっとまってね。すぐいくわ」「先生、ここ穴あけて」「はい穴あいたわよ。先生ちょっとごちそういただいてくるわね」（中略）

その中に十一時すぎ、中断するのはかわいそう位いっしょうけんめいそれぞれ生活をたのしんでいる。しかおべんとうなので、「またあした続きしましょうね」「僕今日つくらなかつたからあしたつくる」と砂場から手をふきふき入ってきた。（後略）

一日のこまだが、その日の中に経験できなかったことは次の日にと、自分たちもちゃんとその生活の流れを上手に泳いでいる。

五才児になるとその流れは、むしろ大人である私共はともするとおいてきぼりになりそう。『先生こうしたらよい』『あしたはこうしよう』と幼児の中にその日の流れはその日で止るのでなく次へ、次へと流れてゆき、幼児たちがその流れを創造していくようだ。幼児はその流れをすいすいと泳ぎ、教師は後からみまもりながら泳いでついでいく。

砂場は砂場、ままごととはままごと、仕事は仕事の流れがそれぞれできていようだ。その流れが入りまじって大きな流れになっていくのが五才児で、幼児自身、かたよらないようにそれぞれの流れの中を泳いでいる。たまにかたよった人がいる時は、教師がそれを調整するのが五才児の教師の指導の一つであろう。

○流れのせきとめ

幼稚園生活にはやはり集団生活なので、幼児からみると事務的な仕事が多たまある。園全体でおたんじょう会その他を一しょにするなど、幼児の生活の流れをちゃん切らねばならぬことがたまにある。午前十時からゆうぎ室でおたんじょう会というのと、いくら流れをくずさないようにと言っても集団生活をしている以上やはりこれは行動を共にする必要がある。しかしおたんじょう会などのようにたまにあるものはむしろ幼児も新らしさを味つてよいのだが、卒業期を前にひかえてくると式の練習とか、歌の練習とかやはり、いわ

ゆる練習を要するものが出てくる。

せつかく一しょうけんめい遊んでいると、『おあつまりー』と呼ばれる。何だろうと入っていると歌を教えられる。と次にはお免状いただく練習。また学芸会などある時は、げきや楽隊の練習。時にはそれに必要な製作。それがおわるとおべんどう。毎日毎日朝登園してくるとちょっとあそんだかと思うと、『おあつまりー』あとは部屋にかんづめ。おべんどう。午後から少し遊んでおかえり。毎日このくりかえし。気の毒だと心におもいつつやむをえずこんなくりかえし。そのうちにある朝、二人のおかあさまがみえ、『この頃家の子がたいへん帰る時ふくれまして、家へ帰ってもいららばっかりしてあたりちります』。家の子は熱をだし、つかれたつかれたと申しますのでお医者さまにみせましたらどこも悪くない、疲れでしようといわれ一日お休み致しました。

私は何だか心の中でおかしくなった。子どもは子どもの世界の中に泳がせなければ。魚が水の外に出すとぐったりしてしまふと同じ、幼児も幼児の生活の流れの中に泳がしてこそ、その本質を發揮して生き生きと生活し、生き生きと発達していくのだ。

私もはその一日の流れをくずさないように私どもの計画を折り込んで指導し、幼児の生活がよりたのしく、より豊かに、そしてその流れが深く、たくましく流れるように努力すべきだと、むしろ幼児から常に教えられる。